

③ 3474-2/3

3,582-1/2

電井67° 230°
③ 3474-2/3
藤原上 帝説
本文の19°

622年 49才
574 1才
48 48

おいたち 261°
生長すること、またその経歴

既戸豊聰耳皇子の生いたち

一部重複するが

ここに

時代を遡り、

既戸豊聰耳皇子

上

聖徳王

の幼少の頃を振り返って

みる

とくに

先述の如く、聖徳太子誕生の年につ

いては、

① 敏達元年（五七二）正月一日

② 敏達二年（五七三）

③ 敏達三年（五七四）

等の説がある。

■ 先述の如く

「聖徳太子は、敏達三年に誕生されたので

あろう

とする説が、現在、最も有力視されて

・この物語において、「聖徳太子、敏達三

年（五七四）誕生説」に従うことにしたい。

（第六十六章）聖徳太子誕生の年

ひ
妃¹⁸⁴⁵ 竜井⁷³ 藤原⁽¹⁾⁷²
の²¹⁷⁰ 紀¹⁵⁶ 紀¹⁷³ 注²³ 歴²³

3,582^{P-2/2}

紀小²⁹⁴
紀下¹⁷³

ためのみに
田目皇子(多米王)
紀¹⁵⁶ 紀¹⁷³ 注²³ 歴²³

の項におりて既述)

推古紀元年(五九三)四月十日条には、
戸豊聰耳皇子の出産についで、こう述べらる

ている。

皇子は橘豊日天皇(用明天皇)の第二子
で、母の皇后を穴穂部間人皇女と申し上げる。
皇后は、御出産の日に、宮中をめぐって各
官司を御視察され、馬官までおりでになつ
たとき、既の戸につき当って、
苦しみにな

ることなく、急にお産みになつた。
皇子は、お生まれになるともう言葉をお
話になり、聖人のような知恵をおもちであ
つた。

という。

*尚、聖徳太子の庶兄は、多米王(田目皇子)である。(紀他参照)

このところ、聖徳太子伝暦には、次のと
おり平易に記述されている。

「妃、第中を巡り、既の下に至つて覚えず
産有り。女孺驚き抱きまゐらせて疾く寢殿に

田村円澄 174^p 荒唐無稽 752^p 尾井 285^p 尾井 1939^p
 藤原(中) 297^p 奥聞 147^p 瑞 53^p 3,583^p 933^p 聖徳太子伝 3564^p 馬子 84^p
 (上) 12^p 56^p 57^p 58^p 59^p 60^p 61^p 62^p 63^p 64^p 65^p 66^p 67^p 68^p 69^p 70^p 71^p 72^p 73^p 74^p 75^p 76^p 77^p 78^p 79^p 80^p 81^p 82^p 83^p 84^p 85^p 86^p 87^p 88^p 89^p 90^p 91^p 92^p 93^p 94^p 95^p 96^p 97^p 98^p 99^p 100^p

入る。妃また恙無しとある。(聖徳太子) 龜井勝一郎、日本サービスセンター、七三頁参照

ともあれ、
 厩戸豊聰耳皇子は、あめただしくも恙無

くお生まれになった。というくであらう。

★ や、聖徳太子伝暦

とところで、聖徳太子は、後代の日本書紀をはじめてとする諸書において、7人間以上

の座に据えられることになった。

大成として、藤原兼輔(ハ七七九三三)の撰述した聖徳太子伝暦に描かれた

ている太子像は、荒唐無稽な異聞奇瑞で満た

されてゐる。(「聖徳太子」田村圓澄、中公

新書、一七四頁参照) 例えは、

① 聖徳太子は、敏達天皇の元年正月一日に誕生されたという。(聖徳太子伝暦)

②209 かいこう 伝 解近 351 藤原 82 藤原 82 藤原 82

元い 伝 素地 1306

3,584

伝 1611 田村 175 同 3586 藤原 72

147 伝 1028 藤原 297 藤原 145 傳

22頁から

聖徳太子が凡人でないことを誇張する為
元年正月一日に記したのだから
傳暦補註に「この日付は天下古今の定談也」と断じてあるけれども、決して当てにはならない。「聖徳太子伝」(F)藤原猶雪、臨川書店
二九七頁参照
②その翌年の(敏達)二年二月十五日「釈尊の涅槃(入滅)の日」に、二歳の太子は東を向き「南無仏」と称えて再拝されたという。(聖徳太子伝)「日本書紀」二年二月一日に太子は東の日
迎日本国の天皇になられた
と思われるが、これが、
二年二月に、二歳の太子は東を向いて南無仏と称え、再拝されたという話の素地になつたのかも知れない。

聖徳太子(凡人)

42770K H11.8.15

紀F173

3,585P-1/2

いまいち 104P
異彩 ちかたてすてめたけり

前頁

四月条に、こゝろさめていゝ。
③また太子の異彩ぶりについて、推古元年
生れまゝなから能く言ふ。聖の智有り。
壯に及びて、一に十人の訴を聞きたまひて、
失ちたまはずして能く辨へたまふ。兼ねて未
然を知ろしめす。且、内教（仏教）を高麗の
僧慧慈に習ひ、外典（儒教の經典）を博士覺
如に學びたまふ。並に悉に達りたまひぬ。父
の天皇、總々みたまひて、宮の南の上殿に居ら
しめたまふ。故、其の名を稱へて、上宮殿戸

日本書紀

3,585^{P-2/2} ^{電 240} ^{香 116} ^{いたい 衣帯} ¹⁶ ^{に F/58} ^{藤 上 79}

^{大 2463} ^{飯 吳 漢} ^{ハニ} ^{再 吳 漢} ^{サイ} ¹⁹⁵

3/27 F3/27
3/27

豊聰耳太子と謂す
とある。

④ 聖徳太子伝暦 甲明二年四月条
は、父帝用明天皇が、^{はつひやう}発病され、^{ときたうし}た時の太子の様子を述べており、
「太子、衣帯を解かす、日夜病に待す。天
皇一飯すれば太子一飯す。天皇再飯すれば太
子再飯す。香爐を擎げて祈請す。云々」
と、^{記載}たことか記されている。(「聖徳太子

田村圓澄、中公新書、一七五頁参照)

*

⑥ 3582¹/₂ 149
先立の通り
3573²/₃ 159

先述のよう

敏達二年二月十五日
秋尊の涅槃（入滅）

南無仙

藤原上72⁰ 同(百)3584⁰ 855

第17. 第2 459

57

北達率日羅とが、
 解^{かい}近^{こう}に
 へめぐりあひ、
 された劇^{がく}

かみこ
通船 5351^P 209^{P-1/3} 17
藤原(上) 76^P 龜 #82^P 3
247/4299

特別重要なのだらう、と思われ
このころ百病に居た。

新(1)-181^P上左
10⁺
1 陸上96⁺2⁺斤
9 紀下142^P

日曜は
異常な傑物だ
という噂

コクヨ ケー-20 20×20

新(1)-181P下末
H.S. 1.4 用(2)
→ 209P-3/3 1299

「小冊」16頁 新(1)-125P下末
目録書後 35P
→ 209P-3/3

3,586P - 3/2

目録は 教団12年刊、聖徳太子伝 130P
改行
紀下142P
紀下144注13
209P 同文 密元1867P 紀12年10月

3/9
群英漢
グン
1652
主筆
う

358P-3/3
55P
二の頁末行
時

を聞いた太子へ当時十歳であつたらうか
は、密かに群童にまじつて、日羅の姿を望見
された。

顔を走り見て、その時、合学して、日羅は、太子のお
顔を

と唱えた、聖徳太子伝
敬れ救世観世音大菩薩、伝燈東方栗散王

と唱えた、聖徳太子伝
聖徳太子 亀井勝一郎、日本ソナ
ハ二頁参照

栗散王は、小国の王の意である。
「云辞苑」へ栗散王参照

あるいは、東方の栗散王とは、後年
東方の小国、日辺日本国の王となる、等与

カ弥々大王の事を指しているのかも知れ
ない。

なお、舊唐書倭国日本傳に
「或は云う、日本は舊小国、倭国の地を併

せたりと」
とある。「其の筋」第二編の冒頭において既述

・敏達十二年(五八三)頃、日辺日
本国は、大倭国の東方の辺に

ある「其の筋」第三編とみなされていたのであらう。
「其の筋」第三編とみなされていたのであらう。

③3589P 同 45.1.5(4) ④ 48.11.2(4) ⑤ 3596P ⑥ 3587P ⑦ 3585-1/2 紀下174Pに「上殿」 ⑧ 4183P 紀下154P

臨川書店、二九八頁参照

● 混雑と一して、どちらか正しいのか決着

是の皇子は初め上宮に居り、後に斑鳩に移りたまふ

池邊雙槻宮の

上殿・上宮

既戸豊聰耳皇子が居られたとい

う上殿・上宮は、どう考え

たらよいのだろうか。

■ 従来、カミツミヤについて、用明天皇の「上殿」とする説と、推古天皇の豊浦宮の「上宮」とする説がある。

① 推古紀元年四月条に

父天皇愛みたまひて宮の南の上殿に居らめたまふ

「父天皇愛之、令居宮南上殿」

「父天皇これによれば、既戸皇子は、用明天皇の上殿に居られたように思われる。

② しかし、用明紀元年正月条には、

「是皇子初居上宮、後移斑鳩」

太子が斑鳩に移

居されたのは推古十三年であるから、それ以前には、推古天皇の上宮に居られたように

解されよう。→「聖徳太子伝」(下)藤原猶雪、

上宮鑑録
 新南記事
 多勢利
 5.35.92
 混成 } 849
 5軍法 }

はつきそうにない。

● もーかいたら、日本書紀の編纂者達は、
へ後代の読者達を混乱させようとして、
どちらにも解読できるように、あえてうやむ
やな記述をしたのかも知れない。

● 一部のみにあまりにも鮮明であつたら、他が
甚だしく見える。日本書紀全体を通して
て、同じように不明瞭な文章にしておいた方
がよい、と考えられたのではなからうか。

＊ でないか？

以下参考までに、思うところを述べてみよう。

■ 推古紀元年四月条に、
父の天皇、愛みたまひて、宮の南の上殿
に居らめたまふ。用明
とあるのだから、父天皇が在位してお
られた頃の厩戸豊聰耳皇子の日上殿は、用
明天皇の池邊雙槻宮の南にあつたのであろう。

● なお、父の用明天皇が即位されたのは五八
五年九月五日であり、この時厩戸豊聰
耳皇子は十二歳であり、この時厩戸豊聰
とすれば、それ以前の、厩戸皇子の幼少時

15.1.7(木) 紀下186

大カン761P 于に 紀下155 3.589P 同 由3587P

いつくむ 紀下1631

ニと 紀下1742P 父の天皇 愛したまひ上 展に 前15

とある。

② 日本書紀に推古十三年十月条に、
 「皇太子、斑鳩宮に居す」
 ① 聖徳太子伝暦に推古十三年十月条に、
 「太子遷于斑鳩宮」
 推古十三年(六〇五)の十月のことだったようである。
 一方、用明紀元年正月条には、
 「是の皇子(厩戸皇子)、初め上宮に居す。
 後に斑鳩に移りたまふ」
 とある。

の居所はどこだったのだろうか。
 ・それは、知る由もない。
 父橘豊日皇子と同居しておられたのか、そうでなかったのかさえも、分らない。
 ・とはいえ、橘豊日皇子は、子厩戸豊聰耳皇子を「幼いころから、とりわけ可愛いがつて思つておられたように拝察される。」
 ・そこで父用明天皇は、即位の後、厩戸豊聰耳皇子を宮(池邊雙槻宮)の南の口上殿に住まめせになつたと考えられる。

(五八六)

用明紀元年正月
「初九」(奇) 3587 表6行

新村
字號
151^P

解さる
③ 3594-3/2
理解さる ③ 3590 3/2

3591 1/2 ③ 3588 1/2

あと書き
後先
593
586
③ 3588
189 (586)

という意味であつたかも知れない。

●もしもそうならば、

へ推古元年（五九三）四月、日辺日本国の

皇太子となつた厩戸皇子は、初め、上宮

（今の坂田寺の）ところにあつた宮に居られ

たか、―――後年の推古十三年（六〇五）十

月、斑鳩宮へお遷りになつた

と解さる。（第437回へ坂田寺近傍図参照）

■つまり、

①用明天皇が厩戸皇子を住まわせになつたと

いう（上宮の）初めのころ

②推古天皇の御代に、厩戸皇子が初めお住い

になつた（上宮）（坂田寺の処にあつた宮）

の両者は、全く別なものであろうと推察される。

■ところが日本書紀の編者は、この二つのよ

く似た出来事を、あえて紛らわしく記述して

いるのであろう。（五八六）

へ先ず用明紀元年正月条に太子が上宮に

から斑鳩へ移られたことを述べ、~~七年~~後の推

古紀元年四月条に父天皇が厩戸皇子を上殿

に住まわせられたことを記して、―――

3,591^P - 2 / 2

・右頁の右上(頁の1/4)に、
はみ出して大きく掲載
下さい。



1409 第437図 ^{さかたでら} 坂田寺近傍図

1304

『飛鳥むかむかし』飛鳥誕生編、奈良文化財研究所、朝日新聞出版、2016年8月25日発行、58頁参照。

あとさき
後先 48

いひん
要聞 147

3593P

3,592P-1/2

秋 1608
地名 1059
秋 1608

紀下 155P注 26
亀井 74P 4-5行

藤下 298P

時の順の後先を逆にし、後世の読者の思考を
攪乱しようと思つた。
ように見受けられる。

*

もつとも現在、
上宮を坂田寺とは、何の據なるや、尤も
異聞なり

と言われている。へ「聖徳太子伝」(下)藤原猶

雪、臨川書店、一九〇頁参照

な、上宮は、平安末期写の宮内庁本

や、秋紀秋訓等においてカムツミヤと訓

ま、秋紀秋訓等においてカムツミヤと訓

伝にあって、これを否定し、本居宣長「古事記

十市郡上宮村の地名により、宇閑能美夜

と訓むべきであらうし

と述べた。「日本書紀」(下)日本古典文学大系

岩波書店、一五五頁注二六。「聖徳太子」亀

井勝一郎、七四頁。「聖徳太子伝」(下)藤原猶

雪、臨川書店、二九八頁参照)

・そしてこれ以降、山間部の「坂田寺の」ところでなく、平野部の「大和国十市郡」上元宮村、字上宮寺の地が有力視されてきたのだ。 (のちに磯城郡 現在桜井市)

ことに最近、上元宮の「上元宮遺跡」から、六世紀末の大建築群が見出されて話題になっている。

・これは「この建築群は南向きでなくて東向きであり、太子にふさわしい遺物が出たわけでもない」という。

・また、文献に「上元宮」という地名が出てくるのは十六世紀以後であって、太子の「上元宮」に由来するとは考えにくく、「上元宮」の地が、「上元宮」とどこまで結びつかないか疑問視する声も少くない。(「朝日新聞」昭和六三年三月十一日付参照)

■ともしれば、「坂田寺の地」を軽くして、「上元宮」とよく似た地名の「上元宮」に注目

地図 OK

H5.1.8
H11.8.16

5file 3593
「南端」グループ 30号と 3590
坂田寺 新井村 150 同文 3590

3,593^{7-1/3} 居宮南 } 3590¹

何の境 3592^{1/2}

一がちであるが、
へ口上え宮の方、
より明白な據がある
とは思えない
田寺の処は、あまりにも南にありすぎるよ
うな印象を受ける。
たが先述の通り扶桑略記に
「命居宮南。稱上宮太子。今謂坂田寺。是
其處也」
と記されているからには、何らかの伝承があ
ったのだから
近年、奈良県高市郡明日香村南端の口坂田
寺跡から、奈良時代後期の回廊の柱や連子
窓などが、倒壊したままの状態出土した
「豪華な建物跡、仏像を安置する台座（須
弥壇）が見出された。」
宮の南とはいつても、口坂

写真図版

633

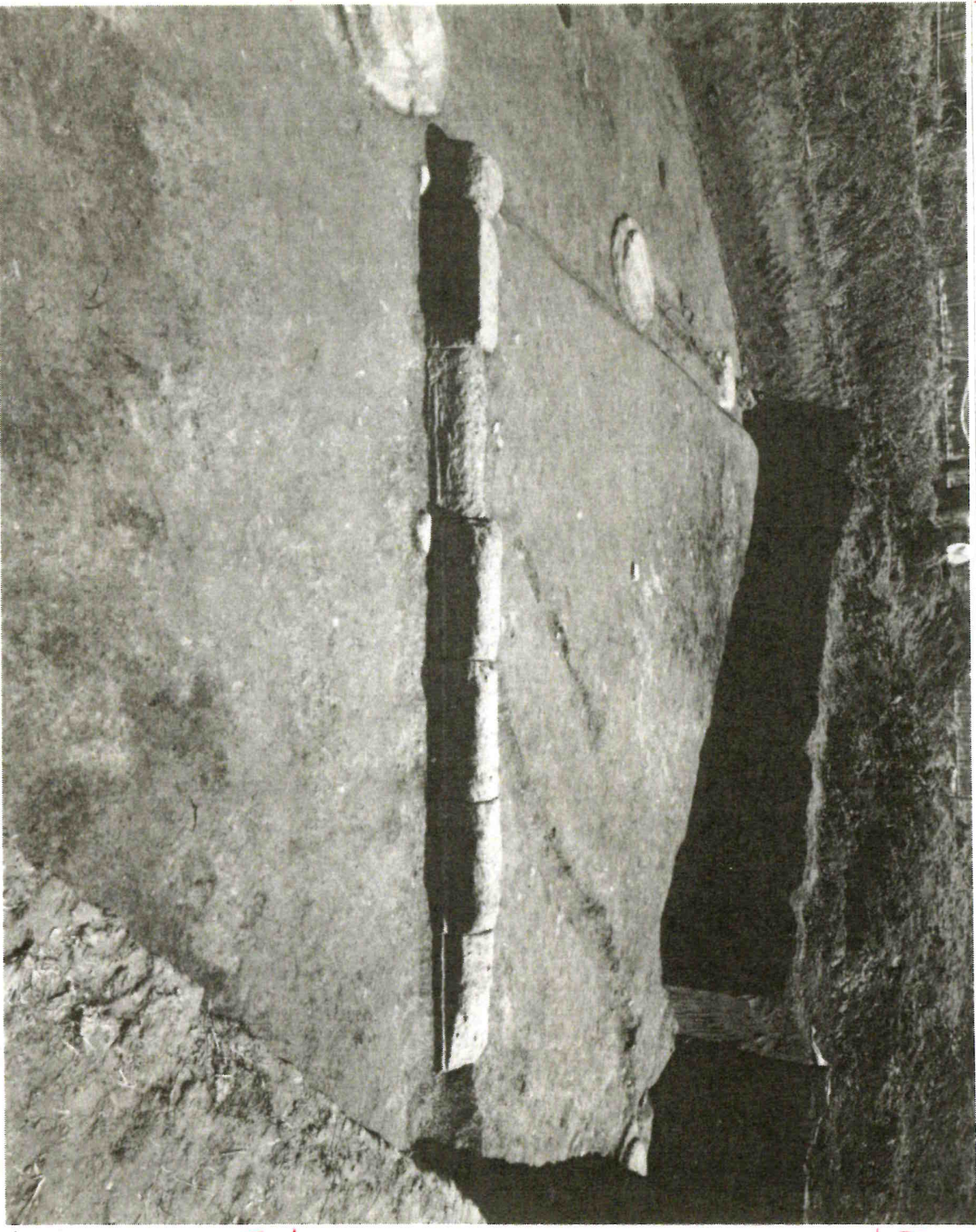
634

参照

- ・右頁の上(1/4頁)に掲載下さい。
- ・ ℓ_1 を、次頁の ℓ_2 に合わせて下さい。

68^P

ℓ_1



3,593P-2/3

カ

カ

1409 写真図版 633 坂田寺発掘跡

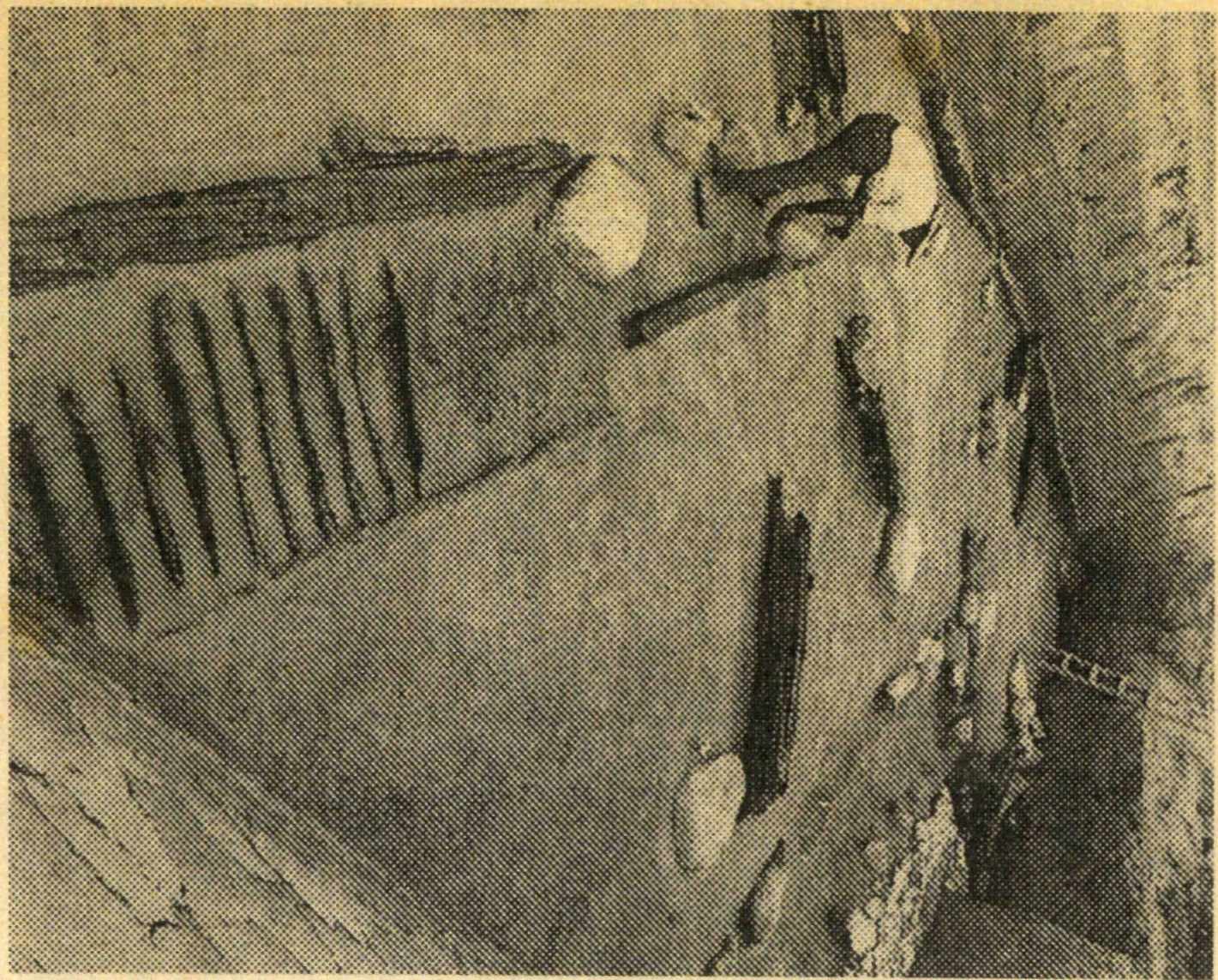
1309

名宝日本の美術 『法隆寺』 おおきい ゆうや 大西修也、小学館、1990年10月1日発行、123頁参照。

・右頭の下(3/4角)
に掲載下さい。

22

3,593^p-3/3



69

1409

写真図版

634

坂田寺跡から出土した回廊の遺構。手前が
倒れた状態の連子窓

1309

『朝日新聞』平成2年6月29日付「坂田寺」倒壊の回廊」出土」参照。

聖徳太子傳
③ 3580^p - 4/4 天

③ 3818^p 紀下198^p
③ 3,575^p

③ 3590^p 末 13^頁

③ 3604^p - 3/4 表

3,594^p - 1/2

711 - 711 30^p ほど
とはいえ ③ 3589^p 5^頁 (こと)

おこなう 世人 百科④
皇朝十 = 銭 - 194^p
日本経済
ルビ無

そーて台座の下の土の中からは、七六五年
発行の神功開宝（貨幣）など鎮壇具多数が見
つかり、坂田寺がこの当時、かなり重要視さ
れていたことか分った
という。へー朝日新聞「平成二年六月二十九日
付等参照」
（たが）
へー坂田寺のころに、推古朝に溯る宮
があったのかどうか
たづいては現時点では分らない。
（五九三）
しかしとりあえず、扶桑略記の記述を信じ
て
「推古元年四月に、推古天皇は、麻戸皇子
を皇太子と爲し、
坂田寺のところに住まわせになった
と仮定してみたい。
また、この物語では、
へ新羅を撃つ大將軍
（太子房人皇子）
が薨去された推古十一年の翌年の推古十二年
（六〇四）正月に、
等与刀弥々大王は、

紀下160^P 28

紀下188^P

3,594^P - 3/2

次頁 10~12頁

理解される 3590^P 3頁

3591^P

3589^P 末

3580^P - 4/4 末

3842^P 推古12年正月10日

「みだい」 16頁

3515^P - 1/2

という。(日本書紀)(下)日本古典文学大系、岩波書店、一六〇頁(八参照)

二朝の世もなくなす為、自ら大王の位を返
 上して皇太子になられた
 と考えたい(巻頭の第10表参照)追って詳述
 十月、
 太子遷于斑鳩宮
 と記されていいるとあり、聖徳太子は斑鳩宮へ
 お遷りになったと解される。「聖徳太子伝
 暦」推古十三年十月条参照。既述
 一方、それまで等与刀弥々大王(開化天皇
 が居所としておられたところに、鞍作鳥が、
 (別名坂田寺か)を建てられたようである。
 推古紀十四年(六〇六)五月条に、
 鞍作鳥は天皇の爲に、金剛寺を作る。
 是今、南洲の坂田尼寺と謂ふ
 とある。
 この記事に関連して、次のように述べられてい
 る。現在、高市郡明日香村坂田に金剛寺があ
 り、旧坂田寺の法燈をつぐという。その北方
 に坂田寺旧址と称する所があり、布目瓦が散
 布し、礎石もある。その南に南洲山がある

3,595^P-1/2

坂田寺

数似(3502^P-1/2~2/2

紀下160^P459~

次頁から

注ハ参照)

(F) 日本古典文学大系、岩波書店、一六〇頁、

推古紀十四年五月条の日金剛寺^{（こんごうじ）}、日坂田尼^{（さかたのあま）}寺^{（じ）}と同寺であらう、という。(「日本書紀

用明紀二年四月条に、
「用明」天皇の^{（みやまひり）}倉^{（くら）}轉^{（ころ）}盛^{（さか）}なり。
ま^{（ま）}ひな^{（ひな）}むとする時に、鞍部多須奈^{（くらつくりのたすな）}、司馬達等^{（しまたち）}か子なり。進みて奏^{（そう）}して曰^{（いは）}さく。
臣^{（みづか）}、天皇の奉^{（ほう）}為^{（み）}に、出家^{（いけ）}して修道^{（しゆだう）}はむ。
又、丈六の佛像及^{（また）}ひ寺を造り奉^{（ほう）}らむ。
とま^{（ま）}うす。天皇、為^{（ため）}に悲^{（かな）}ひ憐^{（あは）}ひたまふ。今、
南^{（みなみ）}洲^{（しう）}の坂田寺^{（さかたじ）}の木^{（き）}の丈六^{（さうろく）}の佛像^{（ぶつぞう）}・挾侍^{（けふし）}の菩薩^{（ぼさつ）}。
是^{（こ）}なり。第六十七^{（むすなは）}章^{（しやう）}「用明^{（ようめい）}天皇^{（てんかう）}退位^{（たいゐ）}」の項^{（こう）}参照^{（さうしやう）}。
なお、ここにいう日坂田寺^{（ひさかたじ）}は、

また

前頁へ

田幸 ^{たひろう} へ ^{12.5 a.m.} 金剛寺 ^{こんこうい} に安置 ^{あんち} されたる ^た であらう。

天武五年(六七六)五月 天武天皇は

南^{みな}洲^{ぶちやま}山^ま・細^ほ川^{のみ}山^{やま}で草^{くさ}を刈^かったり、薪^{まき}をと

つたりすること禁するし
と勅された。(紀)

聖徳太子ゆかりの南~~洲~~山あたりを荒^{あら}ては
ならな^{はいり}いと^という配慮^{はいり}なのではなかうか。

✱

3598^P 戸皇子 3587^P
 全文 3504^P 3881^P 上94^P 金井174^P 天皇事 紀下155^P 3行
 戸皇子 推古13年 3594^P 3/2 戸皇子 上94^P 3596^P 天皇事 用明記155^P 2行 日本書紀 277^P 戸1703^P
 戸皇子 推古13年 3594^P 3/2 戸皇子 上94^P 3596^P 天皇事 用明記155^P 2行 日本書紀 277^P 戸1703^P

天皇宮

平安時代初期

崇良時代の仏教説話集である『日本書紀』の
 上巻第四話

聖徳皇太子、異いき表を示す縁

四話には

従天皇宮住上故、日上宮皇也

とあり、

聖徳皇太子は、天皇宮より高い位置にあ

る御殿に住んでおられたので、上の宮の皇と

と解されている。『日本書紀』日本古典文学大

系、岩波書店、七七頁注十三参照

等与刀弥々大王は、天皇事

皇宮より高い位置にある

御殿に住んでおられたので

とも称された、という意味なのではなからうか。

聖徳太子伝暦に推古十三年十月

条から察せられるように、

の位を辞退して太子となられた

戸皇子は、

旦には黒駒に騎りて天皇宮に入りて

政事を奏し、竟れば即ち宮（斑鳩宮）に還り

給ふ。日々に間無し

親上 232⁹

と記されている。
（第1表参照）
奈良盆地南端の坂田寺の処（高市）

- ・ カラー
- ・ 右頁の上半分に、
限度一杯大々
はみ出させて掲載
下さい。
- ・ 明るく、鮮明に
お願いします。



1309
元禄

1409

第438図

黒駒に乗るの聖徳太子御巡行

『堂本印象』具象画編、京都書院、昭和55年8月15日発行、41頁参照

76^P

1409
巡行は
天皇が各地を
まわること

令和元(2019)9.3(山)~9.4(3回)
" 3(2021)H5.11.9(16世)~1.18(4回)

H11.8.16

更にきょう 2人
面 3602P

また → 左

3,598P

④3601P
改訂 百姓

④3505P 3行
④3596
末25行

推古13年10月 マラソン 42.195kmを2時間10分
④3596

1/18
1/16

あろうや(第438) 黒駒に乗っての聖徳太子御巡行(参照)
郡明白香村坂田)から、奈良盆地北端の春日
の地(率川宮)近の約二十五里の道のりを、
等与刀弥々大王は、馬に騎って通わせたので
[日]日本国[の]考[る]天皇が[夢]に[見]た[後]の[動]揺[る]た[後]に[相]違[な]い[で]
する[為]で[等]と[刀]弥[々]大王は[煩]悩[を]極[め]て[お]い[で]た[た]に[相]違[な]い[で]
[後] [そうして、推古十三年十月の斑鳩宮への遷居
へ聖徳太子は、旦(ああ)には斑鳩宮を
出て、黒駒に騎りて天皇宮へ入り、竟れば再
び黒駒に騎って斑鳩宮へお帰りになった
と拝察される。聖徳太子伝暦[推古十三年十月]未[う]に[う]記[さ]れ[て]る
[目]には黒駒に騎りて入りて政事を奏し、竟れば即ち宮に還り給ふ[日々に間無
等与刀弥々大王(聖徳太子)は、四季折々
の人々の営みを肌で知り、人々の願いを自
の心で感取らるゝとされたのかも知れない。
受け止めよう
事するため
また、是の歳に、百済の僧慧聰が来た。(記)
慧聰が帰化して、等与刀弥々大王の師(仏教
の師)となった。(記)
また、是の歳に、百済の僧慧聰が来た。(記)

同4,218'129'~

せいけん
毎頁 元1217' 紀下164' 119,39
3,599' ~~3,599'~~

蘇我と葛城 紀上595' 落慶 元2302' 八土記493' 4218' 15
紀下129' 紀下174' 推古4年11月 月土記493'

伊豫國の湯

ひのえたつ

丙辰年（五九六）の法興六年（推古四年）

十月のこゝであつたと、伊豫國風土記逸文

へ湯泉✓条はいう。巻頭の第10表参照

いよいよ、大倭国（九州）の法興寺の

完成（推古四年十一月）が間近になつてゐた。

この法興寺の落慶式に御臨席の爲であらうか。

等と刀弥々大王は、西方の大倭国（九州）を

指して上つて行かれた。侍は、高麗の惠慈の

法師・葛城臣（蘇我氏と同族）であつた。

なお、伊豫國風土記逸文中に、法興寺建立

を誓願した蘇我馬子宿禰大臣の名が見えな

い。蘇我馬子は法興寺落慶の準備の爲に一足

早く大倭国（九州）に向つたのかも知れない。

に到着してゐたのだらうか。

もつとも

蘇我馬子のことを葛城臣と記述したのである

う

ともいう（『日本書紀』）『日本古典文学大系』小岩波書店「二二角
注十六参照（既述）」
211

↓鳥居 3,600P-2/5

（限定一杯大きく）
左頁の上半分に
掲載下さい。
出来るだけ鮮明
お願いします。

「左端から八分の鳥居印が
分かるようにして下さい。」



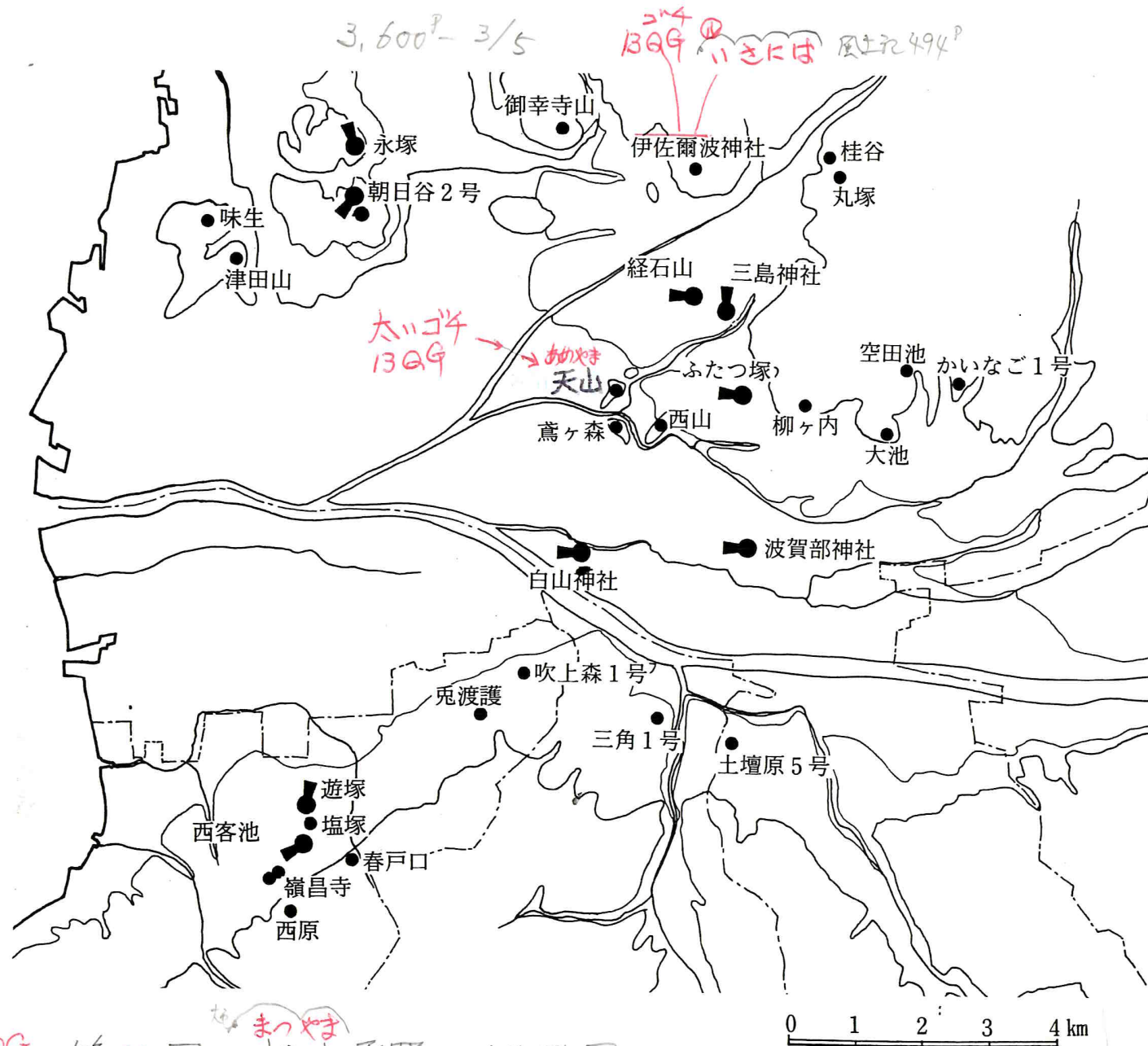
白い部分を、丘傍の色に合わせ、目立たなくしておいて下さい。

1309 1409 第439図 どうぞ 直後温泉郷の絵図（松山市指定文化財）

『松山市史』第一巻 松山市役所 平成4年10月31日発行 口絵参照

中央部のやや左上に、伊佐爾波神社の鳥居が描かれている。 80°

右頁の上半分に
掲載下さい。



13QG

14QG

第440図 松山平野の地形図

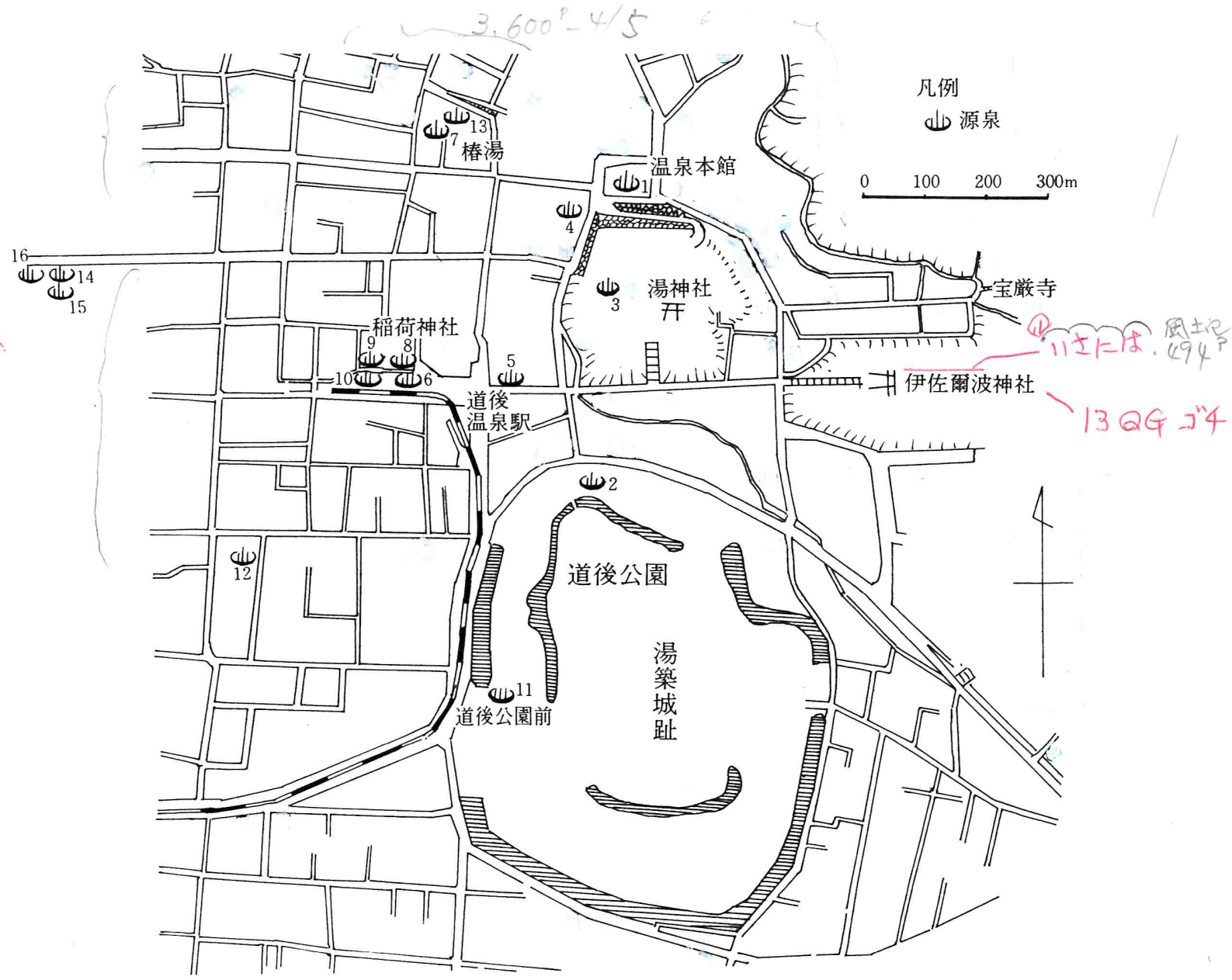
『松山市史』第一巻、松山市役所、平成4年10月31日発行、617頁参照。

・左頁の上半分に
掲載下さい。

・に描かれている線を、
きれいな線に
して下さい。

・ヨゴレをトル

由4469⁸9行



136G

149G

第441図

いさには おか
伊社邇波の岡

←風土記 494⁸4行

『松山市史』第一巻、松山市役所、平成4年10月31日発行、70頁参照、82⁸

↓
drag

惟天日月照
萬民所共
異乎
往來
花柳
而隨
國步
應
於
上
而
不
私
神
井
出
於
下
無
不
給
其
足
而
不
乏
其
用
而
不
竭
其
財
而
不
匱
其
德
而
不
衰
其
功
而
不
廢
其
業
而
不
替
其
聲
而
不
絕
其
光
而
不
滅
其
威
而
不
屈
其
權
而
不
傾
其
勢
而
不
落
其
德
而
不
泯
其
功
而
不
朽
其
業
而
不
替
其
聲
而
不
絕
其
光
而
不
滅
其
威
而
不
屈
其
權
而
不
傾
其
勢
而
不
落

4469^P979

126. (2014) 8.7 松山革命記念館 = カラ-野矢、由由

『松山市史』第一巻 松山市役所、平成4年10月31日発行、694頁参照。

三宅 3576¹/₃, 2/3

3615¹/₃ 3,602¹/₃

寛く 635¹/₃ 神の井由3600¹/₃ 米7¹/₃ 天皇家をせむせ44¹/₃
東は、慧の通用字122494¹/₃ 注4

あつたとも、あるいは伊予国の太子の領地視
察の爲であつたとも、考えにくいように思わ
れる。(「歴史読本」昭和五十九年特別増刊号
新人物往來社、四四頁参照)

法興寺完成

さて、等与刀弥々大王が惠慈・葛城臣と共
に伊予国の神の井で逍遙ひ寛がれた推古四年
十月の翌月一つまり十一月に、大倭国(九州)
で法興寺の造営が完了した。(巻頭の第10表参照)

■日本書紀には、

「(推古)四年十一月に、法興寺造り竟
りぬ。則ち大臣(蘇我馬子大臣)の男善徳臣
を以て寺司に拜す。是の日に、慧慈・慧聰
二の僧始めて法興寺に住り
と記されてゐる。(土地・人民・政治)大臣
等与刀弥々大王と共に、蘇我馬子も東の日
辺日本国において三宅の興隆に力を注ぐこと
となつてゐたので――蘇我馬子の長男である善
徳臣が、西の大倭国の法興寺の寺司に任
じられたのであらう。

令和2(2020)4.16(木)~4.18(4回)

天のせい 3.603^P

③ 3615-17
可^カ_ウ 379 井^{カン} 405
可^カ_タ 379 井^{カン} 405
SEF 175 12/19 領^リ 小林^{コバヤシ}
1060 R
か15. おた

なお

元興寺縁起所引丈六光銘

「巷哥有」
「明」
「脱か」
大臣長子名善徳為

領回以建元興寺

但し、
末尾の元興寺は、
法興寺と置か

替えて読むべきであらうか。

ニ水より後、
法興寺は、
大倭国（九州）

における
仏教信仰
の中心的
な殿堂と
して栄え

た、と推察される。

とある。(一) 日本書紀
L 日本古典文学大系

岩波書店、一七五頁、注一九参照）

一 以建ツニ元興寺一と
 記されてゐる

たか
東の
日本
国に

元男主の山を建てたLという意味なのだろう

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

[illegible]

コクヨ ケー20 20×20

という美味なアツタろう (3606² 3/4 . 86

④ $3618^{\circ} - 279^{\circ}$